

---

# 弱点

坂田火魯志

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

弱点

### 【Nコード】

N3234R

### 【作者名】

坂田火魯志

### 【あらすじ】

一見完璧超人の陽子、ところが彼女が見せてしまった意外な弱点とは。主人公のモデルは某声優さんです。

## 第一章

### 弱点

秋山陽子は成績優秀、容姿端麗で知られている。

クラスでは女子のクラス委員としてしっかり者でもあった。部活は軽音楽部でヴォーカルである。

色白で髪は肩が完全に隠れるまで伸ばしている。髪の色は黒だ。

二重の切れ長の目はやや斜め上になっている。口は普通より少し大きく唇は薄い。背はそれ程高くはないが脚が奇麗だ。全体的にすらりとしている。

確かに見事な容姿である。運動もであった。

「うわ、またやったわね」

「いい記録出してるわ」

「足速いわね」

軽音楽部にしておくのが惜しいとだ。陸上部員に言われる程脚が速い。しかも跳躍も得意だ。つまり運動神経も見事なのだ。

まさに完璧であった。高校きつての才媛とまで言われていた。おまけに性格もすっかりとしていて公平で面倒見がいい。困ったところは何もないようであった。

そんな彼女なので誰からも好かれていた。奢るところもないので余計にだった。しかしだ。

皆こつちも思うのだった。そんな彼女を見てだ。

「確かに凄い娘だけれど」

「弱点何もなし？」

「欠点とかないのかしら」

「どうなのかしら」

人間誰でも欠点や弱点がある。その言葉を彼女にあてはめて考えるのであった。

「今のところそれはないけれど」

「けれど何かあるよね」

「そうよね、何か絶対に」

「あるけれど」

こう考える。しかしだった。

どうしてもそれは見つからなかった。部活においても見事な歌唱を聴かせてくれる。歌も上手いのであった。余計に弱点がなかった。

「ベースの演奏も上手いし」

「音楽もいける」

「じゃあ弱点ないのかな」

「そうなるのかな」

皆そう思い出した。彼女があまりにも何でもできるのだ。

そんな中でだ。文化祭の日が来たのであった。

あるクラスでだ。この出し物になったのであった。

「お化け屋敷にするか」

「そうだよな。ここはとびきり怖くな」

「そんなのにするか」

「ああ、徹底的に怖いのにしような」

そう話してであった。そのクラスはとにかく恐ろしい、誰もが怖がるようなお化け屋敷をすることにしたのであった。それが決まったのであった。

また陽子のクラスではだ。女の子達がこんな話をしていた。

「えっ、出るのあそこ」

「そうなのよ。出るらしいのよ」

何かが出るという話が為されていた。

「どうやらね」

「それマジだったの」

「本当の話だったの」

「そうみたいよ」

興味本位の真面目さでだ。女の子達は顔を見合わせて話していた。その顔は今にもお互いくっつきそうにまでなっていた。そのうえで話

していた。

「あの山に登るとね」

「後ろから一本足の片目のお化けが出て」

「血を吸うって」

「本当だったんだ」

「それって滅茶苦茶怖いじゃない」

「だからよ」

中心になってその話をする娘がここで集まっている皆に話した。

「その日はその山には絶対に登るなって言われてるのよ」

「登ればそのお化けにやられるから」

「だからね」

そしてだった。言われることはだ。

「その山にはその日は絶対に登るな」

「そういうことね」

「つまりは」

「そう、絶対によ」

話をする娘がまた話す。

「そう言われているのよ」

「成程ねえ」

「怖い話もあるわね」

「世間には」

そんな話をしていた。その時だ。

陽子は自分の席にいてそうしてそこから動かない。何処かはなしを聞かないようにしてだ。そこに蹲っているのであった。

話をしていた女の子達は彼女に気付いてだ。声をかけた。

「あれっ、陽子ちゃんどうしたの？」

「何かあったの？」

「元気ないみたいだけれど」

「べ、別に」

話を聞いてだ。びくりとなって返す感じだった。

## 第二章

「何もないわよ」

「そう？ だったらいいけれど」

「それだったらね」

女の子達はその話を聞いてまずはこう述べた。そしてそのうえで  
だった。

彼女に対してだ。 ころも言っただった。

「ねえ、いいかな」

「こつち来ない？」

「今お化けの話してるけれど」

「どう？」

「あつ、私は」

またびくりとした様になっての返答だった。

「別に」

「いいの？」

「そうなの」

「急用を思い立ったから」

女の子達は気付かなかったが実に奇妙な言葉だった。

「それじゃあね」

「そうなの。急用なの」

「じゃあ仕方ないわね」

「そうよね」

「御免なさいね。それじゃあ」

こうしてだった。 陽子はそそくさと自分の席から立ってだ。 クラ  
スから消えた。 その表情も妙に強張っていた。 その後姿を見てだ。

女の子達はだ。 こう話すのであった。

「何かいつもと違うね」

「そうよね。 自分から話に入ってくるのに」

「それがないなんて」

「どういうことかしら」

「楽しい話なのにね」

女の子の一人がまた言った。

「お化けの話ってね」

「そうそう。楽しいのに」

「何で入らないのかしら」

「急用なら仕方ないけれど」

彼女達は気付いていなかったが妙に思っていた。そんなある日の教室だった。

そうして文化祭になった。その文化祭で陽子はというと。

軽音楽部で大活躍だった。ヴォーカルとしてだ。

「うっん、歌やっぱりね」

「上手いよね」

「ベースだつていいし」

「ライブ大成功よね」

「そうね」

これが皆の感想であった。男女共にだ。彼女の歌と演奏は好評であった。

そのことにだ。陽子自身も満足していた。ライブが終わった後の楽屋になつている体育館の一室でだ。バンド仲間に言われていた。

ライブは体育館の中で行われたのだ。学校の文化祭ならではだ。

「よかつたじゃない、陽子ちゃん」

「アンコールまであつたしね」

「評価は上々ね」

「そうみたいね」

黒い上着に黒と白のストライプのタイツとひらひらの黒スカート、それに緑のステッキにシルクハットの衣装の陽子もだ。にこにこしていた。

そのうえでだ。パイプ椅子に座りながら話すのだった。

「前から練習したかいがあったわね」

「そうそう。よかったわね」

「一月前から準備していたしね」

「ライブは大成功」

「そう思っっていたわね」

「それでだけれど」

仲間の一人が言ってきた。

「これからどうする？」

「これから？」

「これからって？」

「だからライブは終わったのよ」

その娘はにこにこしながら仲間達に話す。

「もう私達フリーなのよ」

「あっ、そうね」

「そういえばそうよね」

言われてた。陽子達もそのことに気付いた。思い出したと言って  
もいい。



### 第三章

「楽器とかなおしたらね」

「もうこれでね」

「全部終わりよね」

「それでももうフリーよね」

「だからね。どうするの？」

その娘はまた陽子達に話した。

「これからだけれど」

「ううん、どうしよう」

「それじゃあこれから」

「何する？」

「まず食べる？」

一人がこう言った。

「喫茶店なり出店でね」

「あとお握りのお店もあったわね」

「一年のクラスでね」

「カレーもあったし」

文化祭らしく色々なものがあつた。

「適当に食べ歩くのもいいわね」

「それじゃあ制服に着替えて適当にね」

「あちこち回ろう」

「そうしよう」

そうした話になつたのであつた。そしてだ。

陽子達は制服に着替えて楽器を部室になおしてだ。自由になつてからそのうえで学校を巡ることにした。まず行った場所は。

「たこ焼きにいか焼き」

「どっちも最高ね」

「そうよね」

まずはその店に行って買ってだ。歩きながらそれぞれ食べていた。横になって歩く彼女達の周りを制服の男女が行き来している。

「どっちも美味しいよね」

「こつしたお祭りってやっぱりこつこついうのよね」

「そうそう、たこ焼きとかいか焼きとか」

「最初はそれで」

「次はね」

その次は何かといたのであった。

「今度はフランクフルトにしよう」

「お好み焼きもよくない？」

「カレーも外せないわよ」

食べ物次々と挙げられていく。

「お握りもね」

「喫茶店でコーヒー飲もう」

「デザートはアイスクリームにしない？」

「何か食べるの一杯ね」

「太らないかな」

賑やかかつ楽しくだ、文化祭を過ごしていた。

そしてここだ。一人が言った。

「ねえ」

「ねえって？」

「何かあったの？」

「お化け屋敷行かない？」

こつ仲間達に言うのであった。

「今からね」

「お化け屋敷？」

「そこに？」

「そう、そこ」

まさにそこにだというのだ。

「文化祭の定番だけれどどう？」

「そうね。いいんじゃない？」

「ありきたりだけれどありきたりが面白いしね」

「それじゃあね」

殆どの娘は笑顔でそれがいいとした。しかしだ。

陽子はお化け屋敷と聞いてだ。急にだった。

顔を真っ青にさせてだ。震える感じになる。それで仲間達に言うのであった。

「行くの？」

「うん、行かない？」

「お化け屋敷にね」

仲間達は平気な顔でその陽子に述べる。

「これから皆でね」

「それでどう？」

「う、うん」

その青い顔でだ。答える陽子だった。

## 第四章

「それじゃあ行くのね」

「私お化け屋敷大好きだしね」

「私だってね」

他の面々は笑顔である。

「それじゃあ行つてそれで」

「楽しもうよ」

「そうよね」

「お化け屋敷つてそれがいいわよね」

「そうそう」

「そ、そうなのね」

陽子は彼女達の言葉に明らかに戸惑っていた。そうしてであった。仕方なくといった感じでだ。こう言うのであった。

「それじゃあ私も」

「勿論陽子ちゃんもよ」

「バンド仲間はいつも一緒じゃない」

「友達でしょ」

ここで嫌われていないどころか好かれているということが災いした。陽子にとつて。

そうしてであった。陽子はそのお化け屋敷に向かうのであった。

入り口からしてだ。随分とおどろおどろしいものだった。黒をベースにして赤い文字で血糊の様に字が書かれている。そしてだ。

もう壊れた提灯やら墓石やらがある。それを見てだ。

陽子はさらに戸惑つてだ。こう皆に話すのだった。

「な、何かここつて」

「最初から飛ばしてるわねえ」

「もう期待できるつてやつ？」

「そうよね」

他の面々はにこにこしている。

「何かもう中が楽しみ」

「どうなるのかな」

「幽霊とか本物がいたりして」

「あつ、それ最高」

「最高つて」

それを聞いて余計に青い顔になる陽子だった。しかし皆それに気付かずにだ。受付をしている女の子に対して言うのであった。

「五人ね」

「それで御願いな」

「いらつしゃいませ……」

受付の女の子は垂れ目で黒いロングヘアの女の子だった。外見は可愛い。しかしだ。

急に頭をがくん、と左に落としてみせてだ。こつ言つのであった。

「うふふふふふふ……」

「ちょ、ちよつと……」

それを見て青い顔が白いものになる陽子だった。

「ふざけたら」

「いいわねえ、あんたわかつてるじゃない」

「通は入り口から仕掛ける」

「受付からそれするなんて」

「わかつてるわね」

「中に何でもありますよ……」

受付の女の子はさらに調子に乗っていた。病んだ目になってみせての今の言葉だった。外見は可愛いが中身はそんな娘であった。

「それじゃあ」

「よし、じゃあ中に入ろう」

「さて、それじゃあ」

「今からね」

「五人ね」

「うっ、何か……」

陽子だけ元気がない。しかし重足取りで仕方なく中に入ってだ。そうしてだった。

いきなりだ。襲われた。

「怨めしや〜」

「田を返せ〜」

幽霊に泥田坊がだ。暗闇の中からぬっと出て来たのであった。

「取り憑くぞ〜」

「覚悟しろ〜」

そんな幽霊達を見てだ。メンバーはにこにこしている。

## 第五章

「そうそう、これがいいのよ」

「もう最高」

「いきなりそう来る?」

「このお化け屋敷わかってるじゃない」

彼女達にとっては素晴らしいものだった。素直に喜んでそのうえで、中を進んでいく。

進むと血塗れの包丁を持った化け猫に動く雪女、それに口が耳まで裂けたろくろ首に人の生首、背筋には蒟蒻が来てひやりとする。中身は真っ暗で何時何処から何が出て来るかわからない。陽子はその中をだ。仲間の一人の手を掴んで進んだ。

そうして一行が外に出たその時だった。四人は。

「いやあ、よかったよかった」

「テーマパークの遊園地でもこうはいかないわよ」

「こりゃ通が演出したわね」

「見事見事」

心から楽しめてにこにこしている。しかしであった。

ここで四人は陽子を見る。

「ねえ、陽子ちゃんもでしょ?」

「楽しんだでしょ?」

「どう?気分は」

「やっぱり最高?」

しかしだった。その陽子はというと。

一人の服の袖を掴んだまま気絶していた。そうしてずるずると引き摺られていた。そうして外まで出ていたのであった。口から魂が出ている。目は真っ白になっていて顔面蒼白である。死んでいた。

四人はそんな彼女を見てであった。わかったのだった。

「怖かったんだ」

「まさかと思うけれど」

「そうだったんだ」

「お化け屋敷が」

「で、出た……」

その死人が喋った。

「お化けが、幽霊が……」

これで、であった。あることがわかったのであった。

陽子は怖がりである。それも極端な、だ。このことはすぐに校内に知れ渡った。そうしてだ。皆口々にだ。こつ話をするのだった。

「あれでねえ」

「あの娘の弱点だったんだ」

「そうだったのね」

「意外っていうかねえ」

「しつかりした娘なのに」

それでもまだというのであった。

「怖がりだったのね」

「そういえば怪談とか聞こうとしないし」

ここでこのことが思い出された。

「お化け屋敷も何か入りたくなさそうだったし」

「そうした事情だったんだ」

「つまりは」

「けれど」

それでもまだとだ。ここで誰かが言った。

「何かそうしたところがあるってね」

「悪くないわよね」

「可愛いつていうか？」

「人間味があつてね」

「いいんじゃないかな」

その弱点がだ。肯定されるのだった。

「人間完璧だともね」



「そうそう。面白みがないっていうか」

「どうにもならないわよね」

「かえってね」

そうだとだ。話されていくのだった。そして本人はというと。

そのことが、お化け屋敷で気絶したことが悔やまれて仕方なかった。文化祭が終わってもだ。クラスでも部活でも沈み込んでいた。

## 第六章

その彼女にだ。友人達が声をかける。

「まあまあ」

「気にしない気にしない」

「気を取り直してね」

「そうしなさいって」

「気軽に言うけれど」

陽子はそんな彼女達にだ。困り果てた顔で返すのだった。

「あのね、私ね」

「私は？」

「どうだっていうの？」

「あんなところ見せたくなかったのよ」

「こう言うのであった。」

「絶対にね」

「絶対になのね」

「そうなのね」

「そうよ」

また言った。

「絶対に見せたくなかったのよ」

「まあ人間そうしたものってあるけれどね」

「誰でもそれはね」

「あるわよね」

「だからよ。あんなことになって」

「こう言っっていくのだった。」

「もう。どうしていいか」

「弱点見せたくなかったのね」

「そういうことなのね」

「そうよ」

まさにそうだとこのことである。

「どうしよう、本当に」

「そんなに悲しむことはないわよ」

しかしだった。ここで友人の一人がこう彼女に話した。

「別にね」

「別について？」

「そうよ。皆言ってるけれど」

「皆が？」

「人間誰だって弱点はあるわよ」

陽子に言うのはこのことだった。

「誰だってね」

「誰だってなの」

「そうよ。私だってそうだし」

他ならぬ彼女にしてもそうだとこのことだ。

「あれよ。グロとか駄目だからな」

「それがなの」

「そういうこと。そうした意味であんたと同じよ」

極端な怖がりの陽子と、このことである。

「そういうことよ」

「そうなの」

「何度も言うわよ。誰だって弱点はあるの」

またこの陽子に話した。

「人間だからそれは仕方ないの」

「人間だから」

「むしろね」

「むしろ？」

「陽子に弱点がなかったら」

どうかとだ。そうした話になった。

「全然面白くないわよ」

「そうよね。機械じゃないんだから」

「それはね」

「その通りね」

他の友人達もその言葉に頷く。まさにその通りだといっているのである。

「陽子って完璧超人かって思ってたけれど」

「そうしたところもあるって」

「そうよね。わかってね」

「よかったわよ」

こうだ。それぞれ笑顔で話すのだった。

「人間誰だってそういうところがあるのね」

「ちゃんとね」

「じゃあ私は」

陽子はだ。皆からの話を聞いてだ。

少しずつその困り果てた顔を普段のものに戻してだ。「こう言っただけであつた。」

「それを特になのね」

「そうよ。不安に感じたりすることはないのよ」

「そういうこと」

「つまりはね」

「誰だつてそうだからね」

「そうね。じゃあ」

気を取り直した顔でまた言った。

「私もね」

「そうよ。弱点は弱点として受け入れてね」

「そのうえでやっていけばいいのよ」

「確かに怖いのは駄目だけれど」

陽子自身もそれは否定しなかった。できなかった。

「そういうことね」

「そうそう。それじゃあね」

「頑張つてね」

「ええ、そうするわ」

笑顔に戻って頷く。そうしてだった。

陽子は怖がりであることを隠さなくなった。すると以前より人間っぽくなり親しみやすくなったと周りから言われた。彼女にとってもいいことだった。弱点を認めるということは。

弱点 完

2010・12・29

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3234r/>

---

弱点

2011年3月2日22時55分発行